



Data

監督：橋本忍
 原作：橋本忍／加藤哲太郎
 脚本：橋本忍
 出演：フランキー堺／新珠三千代／
 水野久美／笠智衆／中丸忠
 雄／藤田進／加東大介／南
 原伸二／平田昭彦／多々良
 純／藤原釜足

👁️👁️ みどころ

10歳の頃、本作を観て帰った母親から涙ながらに感想を聞かせてもらったことを、私は今でも鮮明に覚えている。そのため、中居正広×仲間由紀恵が共演した2008年版『私は貝になりたい』を観た時は大いに涙を流したが、本作は意外にあっさり！それは、同じ橋本忍の脚本だから作り方が同じで、どうしても二番煎じの感があったためだろう。

本作に見るBC級戦犯を裁く裁判のバカバカしさは今でこそ明白だが、終戦直後にはあれで通用していたらいい。しかし、それで絞首刑にされてしまったら・・・『私は貝になりたい』のセリフの重みを、平和な今だからこそしっかりかみしめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■母親から聞いた“1959年版”を70歳直前にやっと！■□■

1949年生まれ私は、高校を卒業する1967年3月まで生まれ故郷の愛媛県松山市で過ごしたが、映画が大好きだった両親は、小学生の頃からよく私を映画館に連れて行ってくれた。そのお陰で、小学生の時にみた、中村錦之介、東千代之介、片岡千恵蔵、美空ひばり等が出演した映画はおぼろげながら覚えている。また、そのお陰で中学生になってからは一人で映画館に行く習慣ができた。そんな私は、今でもハッキリ、母親がその日観て来たばかりのフランキー堺主演の映画『私は貝になりたい』(59年)について、熱く半分涙ながらに語っていたことを今でも鮮明に覚えている。それは私が10歳の時だから、母親から聞いた内容を正確に理解することはできなかったが、それでも「主人公がかわいそうだ」と涙ながらに訴えていたのはよく理解できた。

そんな記憶があったから、中居正広と仲間由紀恵が共演した、そのリメイク版、いや“完全版”たる『私は貝になりたい』(08年)を2008年10月10日に鑑賞した時は、1959年当時の母親と同じ思いを共有できたと考えていた(『シネマ21』208頁)。しかし、2018年11月23日、70歳を前にしてやっと、母親が観たのと同じ1959年版『私は貝になりたい』を鑑賞できることに。

■□■やっぱり“2枚目”より“個性派”の方が! ■□■

今でこそカタカナ名を名乗る日本人俳優は多いが、1959年当時、芸名をフランキー堺とカタカナで名乗ったのは、かなりの異端児?慶応大学在学時から進駐軍のジャズドラマーとして演奏していた、本名、堺正俊は、進駐軍相手に演奏を行うについて通りがけいようにするため、1954年に“フランキー堺とシティ・スリッカーズ”を結成したそう。このように、彼はその芸名が異端なら、その顔だちもかなり異端だ。

2008年版では中居正広が主人公の清水豊松役をカッコ良く演じたが、本作ではフランキー堺がその役を泥臭く演じている。中居くんも良かったが、やっぱり土佐の高知の清水港にある小さな床屋のオヤジには、フランキー堺のような“個性派”がピッタリ!

■□■本作の清水二等兵VS大宮二等兵、梶二等兵■□■

勝新太郎が大宮貴三郎二等兵役を演じた『兵隊やくざ』シリーズは面白かった。そこでは田村高廣演じる有田上等兵の援護があったが、大宮自身の身体がメチャ強いので、彼はいかなるしごきにもいじめにも耐え抜くことができていた。しかし、“俺のような年長者にはもう赤紙はこない”とタカをくくっていた本作の清水豊松(フランキー堺)は、大宮のような体力はもちろん、上官に逆らう気力などとてもとても……。また、『人間の条件』全6部作(59年~61年)の第3部、第4部では、体力も気力も人一倍達者な梶二等兵(仲代達矢)は、過酷な戦地でも十分生き延びることができたが、同期で体力のない田中邦衛演じる小原二等兵は、予想どおり途中でダウンし、悲惨な最期が待っていた。

しかして、同期の中で成績の悪い清水二等兵は、ある日の空襲で迎撃されて捕虜となった瀕死の米兵パイロットを、訓練のため銃剣で「殺せ!」と命令されることに。このシークエンスは2008年版も同じだが、1959年版はもっと単純。そして一度目の失敗でビンタを喰らった清水二等兵は、続く二度目の突進でちゃんと上官の命令を達成できたの?そう思っていると、スクリーン上はいきなり戦後の清水港の場面に……。アレレ……。

■□■この法廷のバカバカしさに唖然! ■□■

中居クンと仲間由紀恵が共演した“2008年版”は「リメイク版」ではなく、橋本忍がより完全な脚本を求めて推敲に推敲を重ねた結果補足した脚本による『完全版』とされている。『完全版』では、第1に海の要素を、第2に夫婦愛を補足したそうだから、そんな

視点で1959年版を観ると、なるほど、なるほど・・・。

他方、本作中盤のハイライトになるB級C級戦犯を裁く法廷のバカバカしさは、2008年版と全く同じ。清水に対して「あなたは、なぜ上官の命令を拒否しなかったのですか？」と質問する検事の無理解とバカさ加減は一体ナニ？こんな、おざなりかつバカげた裁判で絞首刑の判決が下されたから、嗤然！

■□■巢鴨プリズンでの生活は？再審嘆願書の効果は？■□■

あの時、あの空襲で撃墜された米機に乗っていたパイロットに対して、日本人の反感や憎みが集中したのは当然。しかし、清水がこの米兵を殺したいと思ったかというそうではない。彼はたまたま自分に巡ってきた嫌な命令をしぶしぶ“実行”しただけだし、彼が銃剣で刺した時、既にその米兵は死んでいた可能性も高い。しかも、あの裁判では軍司令官たる矢野中将（藤田進）が「すべての責任は自分1人にある」と明確に証言していたから、清水二等兵が戦犯にされる理由など全くないはずだ。

そんなわかりきった理屈が通用しなかったから、本作のような悲劇が生まれたわけだが、矢野中将の絞首刑が執行された後にサンフランシスコ講和条約が締結され、死刑囚たちの死刑執行がめっきり減ってくると、巢鴨プリズンにも春到来の雰囲気・・・。そんな中で清水は下手な英語を活用しながら、“再審嘆願書”の作成に精を出し、その提出も終えたから、あとは減刑、釈放の指示を待つだけ。そう思っていると案の定、ある日、清水の部屋の前で看守の足が止まり「Change」と言われたから、こりゃてっきり清水の刑が減刑され釈放されるものと思っていたと、実は・・・。

■□■本作を観て2008年版の完成度を再確認！■□■

夫の清水豊松がB級戦犯として逮捕され、裁判にかけられてしまったら、稼業はどうなるの？あの当時だって散髪屋を営むには理容師の免許が必要だったはずだが、本作では豊松がいない間は、妻の房江（新珠三千代）が豊松にかわってしっかりその仕事をやっていたから、当時は理容師の免許は簡単だったのかも？それはともかく、2008年版では橋本忍脚本に“夫婦愛”の要素が補足されたそうだが、1959年版でも豊松×房江間の夫婦愛は十分伝わってくる。違うのは、2008年版では助命嘆願書を集めるのに房江が大活躍していたことで、1959年版の房江はその点はあくまで受け身。つまり、周りの人たちが助命嘆願で動いてくれるのをただ感謝して見守っているだけだった。

そんな点で多少の違いはあるものの、本作は2008年版と基本的に同じだから、泣かせ所も同じになる。そうなると、2008年版で一度泣いてしまった私は、残念ながら本作を観てもどうしても二番煎じに見えて、泣けないところもあった。やはり、映画から得る感動ははじめての時が一番。そう思いつつ、それなりの感動で本件の鑑賞を終了。

2018（平成30）年11月30日記